〔愛知の児童文化研究　4〕

名古屋の昔話

—岡田弘『名古屋市区別昔話と伝説をたずねて』考—

新　居　正　子

名古屋は、東海道の中ほどにあって、古くより旅人の往来が盛んな地であり、また尾張の国の城下町として、あるいは芸どころとしてにぎわってきた。ところが、こうした都会性が昔話の伝承にはかえってわざわいしたのか、市史や区史の記録をみても、伝説はともかく、昔話はほとんど見られない。(1) 平成3年に児童文化研究班が愛知県下の教育委員会を対象にして行った「昔話と子ども祭りの伝承状況に関するアンケート調査」でも、名古屋市内の昔話の紹介は皆無であった。

『日本昔話通観』第13巻東海編に収録された東海3県の昔話566型、1898話のうち、名古屋市内で採集されたものは6話にすぎず、そのうち4話はむしろ伝説に分類されるべきものであった。(2)『日本昔話通観』東海編の原著は、愛知県関係では、早川孝太郎『三州横山話』、同『猪、鹿、狸』、愛知県教育委員会『愛知県伝説集』、名古屋タイムス社会部『あいちの民話』、東栄町文化財保護委員会『東栄町の民話』、岡田弘『名古屋の民話たずねたずねて』、小島勝彦『おかあさんが集めたなごやの民話』、京都女子大学説話文学研究会他による稿本4稿、新聞、雑誌等である。他の昔話資料としては、愛知県郷土資料刊行会『愛知のむかし話』、『続愛知のむかし話』、小島勝彦『東海の民話』、毎日新聞社『東海の民話』、平松哲夫『東海むかしばなしの旅』等があるが、「むかし話」「民話」と題してはいても、内容は伝説である場合が多く、とくに名古屋市内では、昔話はほとんど採録されていない。

こうした資料の乏しい中にあって、岡田弘は、文字通りただ1人、数十年の歳月をかけて市内各地に出向き、老人から昔話を聞いて回った。集めた話は、名古屋弁のままで再話し、各区毎にまとめて、謄写版で印刷、『東区の昔話と伝説をたずねて』以下、次々に名古屋市全区の昔話・伝説集を自家発行した。そこで本稿では、この岡田弘による『名古屋市区別昔話と伝説をたずねて』を手がかりとして、名古屋の昔話の特徴をさぐっていきたい。

岡田弘の昔話採録

岡田弘は、大正14年名古屋市東区矢田で生まれ、育った。父母も祖父母も名古屋人である。昭和22年に復員して後、名古屋市内の小学校に勤務したが、以来ずっと休日を利用して、名古屋市内を中心

に愛知県下を昔話や伝説を聞いて回った。集めた話は、教室で子どもたちに語って聞かせただけでなく、全国童話人協会の会員として、市内の公共図書館や幼稚園などで口演童話活動を行ってきた。また、岡田は地元矢田町の長母寺で発生した尾張万歳を始めとする郷土史の研究家でもある。

昔話や伝説の聞き歩きについて岡田は、「話すのが苦手であったため、わかるように話すための必要と興味から」(『北区の昔話と伝説をたずねて』あとがきより)、「聞くのが好きだし、聞いた話を子どもたちにしてやるのが楽しみで」(中区同)、「(口演) 童話の話材にしたいこともあって」(東区同) 始めたのだと言っている。採集の期間は、昭和22年から昭和61年に小学校を定年退職するまでの40年間に及んでいる。採集方法は、畑仕事や子守をしている老人を見つけて話しかけ、長い世間話の末に昔話や伝説を引き出す。相手の語る言葉をいちいち反復、確認することによって記憶し、家に帰って、できるだけ話者の語り口調をそのままに記録する。テープレコーダーは使わない。メモもしない。移動手段に車を使わない。家をたずねていって座敷に上がり込んで話を聞いたりはしない。要するに、身構えたり、身構えさせたりすることを極力避け、自然な語りの場と態度を大事にしたと言う。こうして、話を聞いた人の数は2千人に上る。

昔話や伝説は、本来語り継ぐものであると岡田は考えているが、話を覚えていて語ることのできる老人の数が極端に少なくなり、自分自身の語りにも限度があることを感じたため、書いてまとめたものを残しておこうと思い立ち、昭和50年から60年まで、手書きの謄写版印刷で、各区毎に30部から50部、自家出版し、名古屋市各区図書館へ寄贈した。他にも、各区から数話ずつ選び出して1冊にまとめた著書もいくつかあるが、タイトルに「民話」の語を1度だけ使ったことがあり、後になって、この言葉は、「採集」という言葉とともに、書くことを目的とした響きがあるので良くないと後悔していると岡田は語っている。[3]

著書および各区別昔話集の採話数は以下の通りである。

『矢田・大幸たずねたずねて』(上・下巻) 昭和43年。

『尾張万歳たずねたずねて』(前・中・後編) 昭和44年。

『名古屋の民話たずねたずねて』昭和50年。

『名古屋のむかし話』愛知県郷土資料刊行会、昭和55年

『矢田学区の昔語り』昭和57年。

『東区の昔話と伝説をたずねて』〈51話〉

『千種区の昔話と伝説をたずねて』〈46話〉

『中村区の昔話と伝説をたずねて』〈31話〉

『北区の昔話と伝説をたずねて』〈36話〉

『守山区の昔話と伝説をたずねて』〈26話〉

『西区の昔話と伝説をたずねて』〈27話〉

『名東区の昔話と伝説をたずねて』〈15話〉

『中区の昔話と伝説をたずねて』〈20話〉

『熱田区の昔話と伝説をたずねて』〈22話〉

『瑞穂区の昔話と伝説をたずねて』〈19話〉
『緑区の昔話と伝説をたずねて』〈18話〉
『天白区の昔話と伝説をたずねて』〈15話〉
『港区の昔話と伝説をたずねて』〈7話〉
『中川区の昔話と伝説をたずねて』〈14話〉
『南区の昔話と伝説をたずねて』〈12話〉
『昭和区の昔話と伝説をたずねて』〈16話〉

(以上発行順)

分類

名古屋市全区の『昔話と伝説をたずねて』に掲げられた話の総数は375話に上るが、この中には岡田自身の創作（世間話）が2話あり、また同区あるいは他の区にも同じ話が採られているものが6話あるので、分類の対象となるのは367話である。岡田自身は、大きく昔話と伝説に区分し、昔話はおよそ80、伝説は250で、この中には実話もあるようだと記している。(4) 合計数が合わないのは、昭和区16話が入っていないのと、どちらともいえないものを数えていないからだろう。

ここに採られた昔話の特徴を知るために、今少し詳しい分類を試みたが、境界があいまいで、昔話風の伝説もあれば、伝説化された昔話もあり、歴史を語っているのか、伝説となっているのかも判定がむずかしく、一応下記のように分類したが、これはあくまでも大体の傾向を知るための便宜上のものである。

昔話と伝説の区分は、柳田國男が『口承文芸史考』で明らかにして以来、大方の認めるところとなっていて、これは外国の場合もほぼ同様である。すなわち、伝説が土地に結びついているのに対して、昔話は普遍的・抽象的である。また、昔話は発句・結句を始めとする一定の形式があって文芸的であるのに対して伝説は無定形。さらに昔話は話し手も聞き手も「つくりばなし」であることを認めた上でこれを楽しんでいるのに対して、伝説は「ほんとうにあった話」にしたがる。つまり、伝説は歴史的事実に基づくことが多く、さらに歴史化の傾向を持つ。

昔話は、アールネ＆トンプソンによる分類（AT）及び関敬吾他『日本昔話大成』に従って、動物昔話、笑話、本格昔話に分類した。形式譚は1話もなかったため、分類から除外した。大部分を占める伝説については、語り手あるいは伝承経路が語り手に近い人物が、書物から得た知識をもとにしていると思われるきわめて歴史性の強い話は、歴史話とし、伝承性、物語性の認められる伝説そのものと区別した。当地は、近世初期の歴史の激動の中心地であって、他地域に比べて当然歴史話は多いと思われる。また、老人に昔話を知らないかとたずねると、「むかしのはなしかも。ほんなら、この辺のおけ屋の話をしよか。」（東区「おけ屋の嫁さん、その2」）という工合に、世間話や思い出話をすることもあり、ヨーロッパのメルヘンやフェアリー・テイルにあたる昔話はもとより、伝説にも見られる物語性や伝承性のある話は聞き出せないことがよくある。世間話の代表は狐狸話であるが、しかしこうした世間話が昔話や伝説に転化することも考えられる。

このようにきわめてあいまいながら、一応367話中、昔話61話、伝説302話、神話4話に分類した。その内分けは、動物が主人公になっている動物昔話9話、笑話31話、本格昔話21話が昔話であり、伝説では、歴史話47話、世間話133話、宗教説話3話、歌謡4、その他の伝説115話となっている。

特徴としての笑話

この分類で目立つのは笑話である。昔話61話中およそ半数を笑話が占めている。ちなみに平成2～3年に筆者が参加して調査した岐阜県大野郡庄川村の昔話調査報告と比較してみると、総典型話類145話中笑話は66話、すなわち45%が笑話になっており、[5] 昭和55年～平成元年の愛知県長久手町の調査では、67昔話中笑話は13話、19%となっている。[6] 不十分ではあるが、以上の2町村との比較から見ても、笑話が多いのが、岡田弘の集めた名古屋の昔話の特徴といえるだろう。

このことは岡田自身も指摘しており、その理由として、新年を祝って家々に明るい笑いを配って歩いた尾張万歳の影響と、これが発生した土地柄をあげている。「お祝い歌の発祥地というので東区では、明るく、のびのびした、人間味あふれる、そぼくな楽しい話を数多く聞くことができました。」(東区あとがき) また、笑いの質にも言及して、「この本を読むと、むかし話や伝説から、質のよい、品のよい、ほがらかな本当の笑いが聞こえてきませんか。土と暮した昔の人の心にふれる思いがしませんか。」と語っている。(同上)

岡田の集めた笑話のタイトル一覧は次の通りである。

1	天にのぼったなべぶた (中村区)	大　話
2	やぶ医者 (瑞穂区)	ことば遊び
3	お日さんとお月さんとかみなりさん (瑞穂区)	ことば遊び
4	われたどびん (千種区)	ことば遊び
5	こん色に (北区)	ことば遊び
6	汚染にキャラメル (西区)	ことば遊び
7	忘れたくわ (守山区)	ことば遊び
8	鬼は外 (西区)	ことば遊び
9	だんごとぼたもち (緑区)	おろか者
10	かさをさす (南区)	おろか者
11	白いも (緑区)	おろか者
12	ギャアロになったぼたもち (東区)	おろか者
13	柿ぬすっと (千種区)	おろか者
14	めんどくさゃあ (天白区)	おろか者
15	行水 (守山区)	おろか者
16	あわてんぼう (名東区)	おろか者
17	つくる (名東区)	おろか者
18	まんだかまんだか (千種区)	おろか者

19	あわてもんの善さ（港区）	おろか者
20	あじままんじゅう（北区）	おろか者
21	どっこいしょ（天白区）	おろか者
22	一万年目のカメ（千種区）	知恵比べ
23	そんなばかなことあるもんか（昭和区）	知恵比べ
24	粉のもらないざる（守山区）	知恵比べ
25	へそまがりの息子（昭和区）	心　理
26	おばあさんの泣き笑い（北区）	心　理
27	ぼたもちが食べたい（港区）	心　理
28	タイを買うぞ（熱田区）	心　理
29	なたのおまじない（熱田区）	心　理
30	たぬきのてぬぐぅう（昭和区）	動植物
31	でゃあことにんじんとごんぼ（西区）	動植物

柳田國男は、笑話を、大話と隣の爺型の真似そこない話、おろか者話の3つに大きく分けた。大話は、アメリカのトール・テイル tall tale（ほら話）に見られるような誇張による笑いであり（例えば「鴨とり権兵衛」）、他に「屁ひり嫁」のような下の話、女性や子どもには聞かせられないつや話をも含む。長久手町の調査では、3話大話が入っているし、庄川村では大話は19話、うち艶笑譚が5話入っている。

ところが、岡田が集めた名古屋の昔話の中には、こうした大話は見られない。これは、話を聞く人の態度と語られる場も大いに関係していると考えられる。すなわち岡田は教育者であって、老人から話を聞く場合、次にその話を子どもたちに語り伝えることを念頭において合いの手を入れ、興味のありかを表情に示して、「質のよい、品のよい、ほがらかな笑い」に満ちた話を引き出したのであろう。そして、それでも出てきた大話は再話化されなかったのである。具体的には、笑話と認められる31話のうち大話は1話だけ。それも、夫婦げんかで、女房の投げたなべぶたが、天まで上っていって月になった。（「天にのぼったなべぶた」中村区）という素朴なものである。

一休とんち話に見られるような言葉の多義性や音のひびき、しゃれなどによるいわば言葉遊びのおもしろさを語るものが7話ある。たとえば、守山区大森で採集された話に次のようなすじの笑話がある：むかし、たんぼにくわを忘れてきた男がいた。途中、カラスが「クワー、クワー」と鳴いたが気がつかず、家まで来るとニワトリが「トテーコイコイコイ、トテーコイコイコイ」と鳴いたので、はっと気がつき、ひき返そうとしたところ、牛が「モーナイ、モーナイ」と鳴いた（「忘れたくわ」）。また、瑞穂区の例では：むかし、お日さんとお月さんとかみなりさんの3人がそろって旅に行った。宿に泊り、翌朝宿の主人が部屋へ行ってみると、かみなりさん1人しかいない。どうしたことかとたずねると、かみなりは答えた。「やっぱり、月日のたつのは早いものだ。おれはかみなりだで、夕立だ。」（「お日さんとお月さんとかみなりさん」）こうした動物の鳴き声や植物の色形、天体の動きなどの自然

現象を、神々の物語として語るのが神話であるとすれば、昔話は、これをおもしろおかしく笑話で説明する。また、次の話のように固有名詞を使って伝説風に語られる場合でも、本質的には言葉あそびの笑話と考えてよいであろう：堀川べりには大商家が並んでいるが、なかでも川伊藤こと伊藤忠左衛門家では、朝、川から荷を上げる威勢のよい掛け声がひびいた。「お荷物は逃してはいかんぞ。お荷はがっちり店でつかむのじゃ。」節分の夜は「オニは内」と豆をまいたそうだ。(「鬼は内」西区)

笑話の中心はおろか者話である。田舎者が町に出てきた時の失敗談はおろか村ともいわれるが、熱田神宮を持ち、近世には城下町として栄えた名古屋であるから、おろか村話もいくつか見られ、「だんごとぼたもち」緑区、「かさをさす」南区などを含めると、おろか者話は12話に上っている。「ギャアロになったぼたもち」では、欲張りのばあさまが登場する：じいさまとばあさまと息子夫婦がいっしょに住んでいて、ばあさま1人残してみんな田へ仕事に出た。隣家よりぼたもちをもらったが、ばあさまはこれを1人で食べ、残りはふたつきのどんぶりに入れて、「嫁がふたをとったらギャアロ（カエル）になれ」と唱えた。ところが田から帰った嫁がこれを聞いてしまった。嫁は、別のふたつきのどんぶりにカエルを入れ、ぼたもちはみなで食べた。ばあさまが、夜1人でぼたもちを食べようとすると、カエルがとび出したので、ばあさまは「ぼたもちになれ」と叫びながら、どこまでもカエルを追っていった。(東区) このように笑いの標的とされるおろか者が姑であったり、欲張り和尚（「白いも」緑区)、盗人（「柿ぬすっと」千種区）など力を持つ側の人間である場合、嫁や小僧や善良な村人の立場から、権力者や悪人の失敗を笑う「下剋上の笑い」の性格を持つ。笑いは庶民の武器となりうるのである。とはいえ岡田の笑話は、笑いはそれほどしんらつなものではなく、姑がいつまでもぼたもちにならないカエルを追いかけている様子や、和尚が恥をかく様子が、ユーモラスに語られている。

また、おろか息子の例も多い。昔話の世界では、身体的、精神的欠陥が笑いの対象とされてきたが、とりわけ頭の弱い、人のよい男のとんでもない思い違いや失敗談は、権力者に対する嘲笑とは違って、おろかな息子や夫にあきれながらも許容する家族や地域社会の暖かみが感じられる。次はその1例で、「あわてもんの善さ」(港区) の話である。

むかし、むかし。

善さという男がおった。ものすごぉおあわてもんでな。何やってもしくじってばっかおるわ。

ある大みそかの晩、善さは急に言いでゃあた。

「おい、おっかあ。あしたはなあ、にぎり飯、十もこさえとぅてくれ。」

「おみゃあさん、あしたは元日だで。にぎり飯なんかどうしゃあす。」

「たぁけだなあ。あしたは元日だで弁当いるんだがや。熱田さんへおみゃありに行くでな。ちゃんと作っとぅてくれ。」

あわてもんの善さは、はよう元旦にならんかしらんと、いらいらしながら気をもんどるもんで、なかなか眠れん。

「にぎり飯なんか、元旦そうそうから食わんでもええのに。おみぁりして、うちぃきぁあてきてから、雑煮でもゆっくり食やええのに。」

おっかあは、1人でぶつぶつ言いながらも、亭主のためのにぎり飯を作った。それから、善さの寝床をひいて、自分はさっさと寝てまった。

善さは、ひょっとして寝過ごしたらいかんと思って、寝床へひゃあらすと、いろりにあたっとった。けど、いつのまにかそのまま、ぐうたら、ぐうたらと眠ってまった。

徐夜の鐘の音で、ぱっと、目さみゃあた善さは、

「こりゃあいかん、まあひゃあ正月だ。」そう言いながら横を見た。おしりの横のとこに、おっかあが置ぅとぅたにぎり飯の包みがあった。その包みのひもを腰にしばり、新しいわらじをはゃあて、うちをとびでゃあてった。

どうにかこうにか、熱田さんへ着うておみゃありだけはすみゃあたが、まわりの人たちみんな、善さの方向ぅて笑っとる。子どもまでが善さの方向ぅて笑っとる。中には、善さを指差ゃあて大笑いしとる子もおる。

善さは、ははあ、きょうは正月だで、みんなが怒った顔せずに、にこにこしとるんだわと思った。そこで、自分も人の顔見ると向こうの人にまけんように大きな声で、

「はっはっはっは。はっはっはっはっは。」と笑ったと。

そのうちに腹が減ってきたもんで、持ってきたにぎり飯を食べようとして、腹の包みをほどぅた。

「あれえ、こりゃあ、まくらだがや。にぎり飯がまくらに変わったがや。」大声あげてびっくりした。

ちょっとして気がつぅた。

「みんなが笑っとったのはこいつだな。まくらを、寝まきのひもにぶらさげといたもんで、みんなが笑っとったんだわ。」と。

腹は減るし、恥はかくしで、大急ぎでうちへ戻った善さは、うちんなきゃあとびこんだ。

「おい、おっかあ。おみゃあはおれに飯食わさんつもりか。」

大声でどなったけど返事があれせん。けど、目の前にはおっかあが立っとる。よう見たら、隣のおっかあだった。

びっくりして、何にも言わずにそこをとびでゃあた。けど、人ちぎゃあしてどなりつけといた上、あやまらなんだのはいかんと気がつぅた。気がとがめたんだわ。そこでまた、うちんなきゃあとびこんで、

「さっきはどうも失礼しました。あわてとったもんで、つう失礼なことを申しまして。」と、手つぅてあやまったと。

でも隣のおっかあは、まんだだまって立っとる。変だなあと思って顔をあげて見ると、今度は自分のおっかあだったそうだ。

ずっと昔の、あわてもんの善さの話さ。

ここには、あわてものの善さの姿が、みごとに浮かびあがっている。それに、名古屋弁のおかしさもあるが、善さの生む「性格のユーモア」が漂っている。だが、その笑いにはまったく攻撃性がない。

次に、知恵比べとして分類した3話は、1種のなぞ解きであり、話者のたくみな語り口に、聞く者はたやすくなぞの世界に引き込まれ、解答が与えられると、「なあーんだ」という意外性と、「なるほど」と感心して笑う、知性をくすぐられる笑いである。

「そんなばかなことがあるもんか。」(昭和区)の話を例に見てみよう。

ずっとむかしの話だがなあ。

お日待やったり、お祭りでみんなが寄った時など、村の人たちは、ほらふきあったり、うそを言いやぁこしたりして楽しんどったそうだ。そうはいっても、しみゃあには、お互いに話の種が切れて、ばかげた話ばっかしとったと。

ところでな。庄屋さんとこに、1人の娘さんがおってな。今年17になる。賢くて器量よしときとる。だで、

「おむこさんに。」

という仁たちが、村の中ばっかりか、あっちこっちの村から、みゃ日のようにやってござるようになった。けど、庄屋さんは「うん」と言わっせん。

「考えとくわ。」と言うだけだ。娘さんもおんなじだわ。
「わしの娘はかしこょお。だで、そのむこさんは、まっとかしこにゃあといかん。どうやったらそういうおむこさんが来てくれるだろうか。」
庄屋さんは、みゃあ日そんなことばっか考えるようになった。
ある日、ふっと頭に浮かんできた。
「よし、こうすりゃあかしこょおおむこさんが見つかるぞ。」
自分ながらええ考えだと思ったもんで、すぐとでゃあくさんを呼んで、立て札を作らせたんだわなぁ。

> うまくうそを言って、わしに、
> 「そんなばかなことあるものか」
> と言わせたら、わしの娘のおむこさんにする。
> これだけはうそじゃない、ほんとの話だ。
>
> 庄屋

立て札には自分でそう書いて、下男を呼んだ。
「村中で、人が一番ようけ通るとこへ立ててこい。」
下男は、庄屋さんの言った通りに札を立ててきた。
立て札のことは、じっき評判になった。
「ようし、それじゃあ、おれが行くぞ。」若ものたちは張りきって、何人も庄屋さんとこへやってきた。けど、庄屋さんは、
「そうか、そうか」と、すんなりとうなずぅて、話を聞くばっかだわ。
隣村とか、まっととおぅとこの若いもんも何人か来るようになった。けど、庄屋さんはやっぱり、「そうか、そうか。」と、すんなりうなずぅて、話を聞くばっかりさ。
ある日、隣村のその隣村の男は、近所の人に、
「わしが行ってくるわ。」
言って出掛けた。その男、年はわきゃあけど、その村1番の欲張りでけちという評判だったと。
「おう、また来たな。だれでもええで聞かせてもらおうか。」
「庄屋さん、わしはほんとの話をするでよう。」
みゃあ日、みゃあ日、来る男、来る男の、ろくでもにゃあ話を聞くばっかで、庄屋さんはうんざりしとったとこだ。わしがせっかく考えたのに、こんなやり方では、かしこょおおむこさんは見っかりそうにもにゃあと思って、腹がたっとんたんだわ。ちょうどそこへ、けちな男がやってきたんだで。
「ほんとの話でもうっその話でもええで、わしがびっくりするような話をしてくれ。」
庄屋さんは、会うのも聞くのもめんどうだという顔つきだわ。
「庄屋さん、わしのじい様もこの村におったで。」
「それで。」
「わしのじいさまいうのはな。たんぼや畑をようけもっとった大金持だったげな。ほんだけど、庄屋さんとこのじい様は、どえりゃあ貧乏しとってよう。わしのうちへ、腰かがめて、金をよう借りに来たもんだげなで。」
庄屋さんはびっくりした。そんなばかなことあるもんかと思ったわ。
「うそだと思やぁすだろうが、そう言われんようにと、その時の借金の証文いちみゃあ持ってきたでよう。よう見てちょう。」
庄屋さんはまたびっくりした。びっくりしながら、しわくちゃの紙にきゃあたその証文を見ると、次のようにきゃあたった。

借用證
金拾萬両也
右の金子確かにお借りしました。
わたしがそのお金を返せなかったら
子どもが返します。もし子どもが返
せなかったら、孫の代には必ずお返
しします。

まっさおになった庄屋さん、思わずどなった。
「そんなばかなことあるもんか。」
その途端、男はにっこりした。
「庄屋さん、わしがおむこさんに決ったなも。」
むろん、その証文も話もええころかげんなもんだったわさ。ずっとずっと、昔のこったぜえも。

この話は、意外性に支えられている。「そんなばかなことがあるもんか」と言わせたら娘をくれてやるという意外性、そして借金の証文が偽りだったという意外性などから笑いが生じている。ただその背景には、庄屋をびっくりさせた話が借金だったということがある。この話の、庄屋を説いていくくだりにはリアリティーが感じられる。いずれにしても、庄屋とけちな男との貧富の差が背景にあって成り立つ話である。

最後に、心理ばなしと名づけた笑話は、人の心や感情の機微をうかがわせる、これも知的な笑いである。時としてアイロニーやペーソスさえひそませている。たとえば、次にあげる「なたのおまじない」(熱田区) を見てみよう。

昔のことだで。
ある冬のさむぅさ中の夕方こまえに、雪がちらつうてきた。
「おうさぶう。」
ある1人の男、なんにもやることがあれせんで、さぶてさぶてしょうがにゃあ。そんでつれのうちへ遊びに出かけたと。
「おい、しょうぎでもさすか。」
大きな声でゃあて、つれのうちんなきゃあひゃあてったわ。
「おっ、くりゃあな。」
ひとりごと言いながら、板の間へ上がった。外は雪だで、そうは思わなんだけど、夕方ぢきゃあで、うちん中はしゃぐりゃあわなぁ。
「つめてゃあ。」
大きな声出すと恥ずかしいで、男はさっきとおんなじに、ひとりごとだ。何かの上に足がのったんだって。
しゃがんで、そっと手でなでてみるがよう分からん。手にもって見ると、なただった。
前からほしいほしいと思っとった物だ。
そっと辺りを見回したが、しゃぐらてよう分からんけど、だれにも見えんようだと思って、男は、そのなたをさっとふところへ入れた。
「やあ、また、しょうぎか。」

つれは、男に大きな声で言ったもんで、男は一瞬ぴくっとした。けど、なたのことは知らん顔して、しょうぎをやり始めた。そうするときゃあが、さっきまでくりゃあくりゃあと思っとったうちんなかだけど、目がなれてくると、うちん中のようすがよう見えるわ。そうなると男はしょうぎどこでにゃあわ。なたのことが苦になって苦になってしょうがにゃあ。うちのもんに見つかっとるぞと思うと、まあ気になってならん。

　そのうちに、

「おい、しょうぎでもさそみゃあ。」

また一人、近所の男がきた。

「おう、こりゃあくりゃあ。」

それを聞いた先の男は、

「待て待て。ええまじにゃあがあるぞ。」

と、しょうぎをそのままにしといて、あとから来た男のそばへ行ったと。

「小さゃあけど、一尺ぐりゃあのなたをちょっとふところに入れとると、すぐに明るなって、何でか見えるようになるわ。」

「そんなことはじめて聞くが。」

「それがおまじにゃあだ。おれも試してみたけど、ほんとにその通りだったぞ。」

「ほんとか。」

「うそ言わん。すぐに明るなって何でか見えてくるぞ。」

そう言って、そのなたを後から来た男に渡したそうだ。

　ずっと昔の話だわなあ。

雪のちらつく寒い冬の夕べ、明かりもない貧しい木こりの小屋が思い浮かぶ。楽しみといっては、仲間としょうぎをさすぐらいのこと。ところがその友人の大切な仕事の道具であるなたをくすねてしまった。ずしりと重く冷たいなたが、ふところで居心地悪い。根が善良で小心な男、暗さに目が慣れるにつれて心配でたまらなくなり、後から来た男をだまして、その罪を引き継がせてしまったというわけである。こうした誰にも思いあたる心の弱さを描いた笑話には、しっとりとした味わいがあり、心に残るものである。

再話の語り口

昔話は、一定の語り口を持っていることでも伝説や世間話と区別できるが、その１つに発句・結句がある。不特定の時代・場所・人物を表わして、「むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがおりました。」と語り始めるのは全国標準型であるが、これが地方によってさまざまで、たとえば庄川村の場合には、発句は、「さて昔あったげな」という「げな言葉」、結句には「しゃもしゃっきり、あさだねぷっつり。」などと変わったものである。岡田による名古屋の昔話では、結句がないか、あっても発句を多少形を変えてくり返し、昔の話であることを確認して終わるという形をとる場合が多い。それに対して、発句は実に変化に富んでいる。以下にそれをリストアップしてみた。

- むかし。
- むかし、むかし。
- ずっと昔。
- 昔なあ。
- 昔、むかぁし。
- ずっと昔、昔のこと。

- 昔のこと。
- 昔のことだ。
- 昔のこった。
- 昔のことだで。
- 昔のことだけど。
- 昔のことですけど。
- むかしのこったでぇも
- むかしのことだけどよう。
- むかしむかしのこったけどえも。
- むかしのこったがなも。
- むかしのこったけどよう。
- むかしのこったわなあ。
- むかしのことだが。
- 昔のこったけどなも。
- むかしむかし、ずっと昔のことだけどなも。
- 昔の話だで。
- ずっと昔の話だ。
- ずっと、ずっと、むかしの話だで。
- むかしむかし、ずっと昔の話だぜえも。
- むかしむかし、ずっと昔の話だがえも。
- とおぉう昔の話じゃがなあ。
- この話はよう、ずっとまえの話だわなあ。
- 昔なも。
- むかし、むかしのことだ。
- ずっと昔のこったが。
- ずっと昔のこったでぇも。
- ううんと昔のこったぜえも。
- ずっと昔のこったわなも。
- 昔も昔、ずっと昔のこったぜえも。
- むかし、むかし、ずっと昔のこったわ。
- 昔、昔のこったけどなあ。
- ずっと昔のこったがなも。
- ずっと大昔のことですがなも。
- 昔も昔、ずっと大昔のことだわ。
- むかしのことになるがなも。
- ふりゅうこったけどなも。
- ずっと大昔。
- 昔の話だけどよう。
- ずっと昔の話だがなあ。
- 昔も昔、ずっと昔の話さ。
- そりゃあふりゅう話だぜえも。
- ずっとふりゅう昔話だぜえも。
- 昔も昔、大昔の話ですわ。
- 昔のこったわ。そう、大むかしの話だぜえも。

昔という語をくり返したり、それに形容詞をつけたり、名古屋弁独特の語尾をつけたりしてバリエーションを拡げている。昔話だけではなく、伝説にも発句がついていることもあるが、こうしたことから考えて、岡田の話の場合、発句は、話し手と聞き手の対話の中から生まれたものであって、名古屋の昔話の定型というわけではなさそうである。

岡田の昔話や伝説の再話の最も大きな特徴は、ほとんどすべて名古屋弁で語られている点である。全375話中、始めから終わりまで共通語が使われているのは1話だけである。会話文中には、人物によって方言と共通語を使い分けているものもあり、この場合、共通語を話すのは、侍や、女性や、雷の子など、主人公から見て異種の人間である。

名古屋弁の例を「一万年目のカメ」(千種区) に見てみよう。覚王山日泰寺に彼岸まいりに来た老人のあいさつの部分である。

「ええ天気だなも。」
「ほうだなも。おみゃあさまに会うのもやっとかめだなも。」
「ふんとになも。おみゃあさま、まあ、だゃあつうなかっこうしてりゃあしたなも。」
「まあ恥ずかしいこったわなも。ほれにしてもまめでけっこうだなも。」
「ほんなことにゃあわゃあも。きょうもえも。方たがえてまってなも。」
「パスにのってりゃあしたきゃあも。」

「それがえも。ありゅうてきたもんでなも。」
（後略）

名古屋弁の特徴である母音の変化を文字で表現するのはむずかしいが、岡田はこれにこだわり続けている。上記の例文中、「おみゃあさま」、「だゃあつうな」、「してりゃあした」、「にゃあわゃあも」、「のってりゃあした」、「きゃあも」の音は、英語の cat（キャット）に似た音で、きわめてひんぱんに現われる。また、「歩いてきた」は、「ありゅうてきた」と変化しているし、他にもたとえば、「暑い夏」が「あっつぅう夏」となる。また、語尾の豊かさは、先にあげた発句のほとんどが語尾の変化によるものであることからも明らかであろう。

名古屋弁には３つの顔があるといわれる。すなわち、タモリが使って悪名高い「下町ことば」、豪商が集っていた中区の旧碁盤割地区で話されていた、この上もなくていねいな「上町ことば」、そして芸どころ名古屋の姐さんが使う「お座敷ことば」である。こうした方言の差異は、地域の違いあるいは社会階層の違いによるものともいえるが、名古屋市全区を回って集めた岡田の名古屋弁による昔話のコレクションは、東区出身の岡田自身の名古屋弁が再話の基盤になっていることをさし引いて考えても、名古屋弁研究の貴重な資料となるだろう。

言葉の共通性は、人と人を結びつけるために大きな役割を果たすものである。名古屋っ子の岡田は、話を聞く時には名古屋弁で話しかけ、語り手との間にすばやく連帯感を作ってしまう。道ばたやお寺の境内で世間話に花を咲かせ、興がのってきたところで昔話に発展させる。「お年寄りの語り口調をできるだけそのままに」再話したと、岡田自身述べているが、家に帰って記憶を頼りに再話したものは、結局岡田自身の文であり、耳で聞くだけではなく、目で読んでもよくわかるものとなっている。これは、次にあげた完全に録音に頼り、音声を忠実に翻字した長久手町の昔話調査と比べてみればよくわかる。

〈**どっこいしょ**〉　岡田弘『天白区の昔話と伝説をたずねて』より

むかし、むかし、ずっと昔のことだけどな。

あるところに、たわけ息子がおってな。村のわきぁもんたちは、たんぼや畑で朝はようから晩おそうまではたりゃあとるのに、たわけ息子はごろんと寝転んどるだけで、何にも仕事をせん。

それが、どうしてそうなったか知らんけども、隣の村へ秋の取り入れの手つでゃあに行ってな。その時のことだわ。手つでゃあいっても、たわけだもんで仕事なんかは間にあわんわ。

それでも、そのうちの人はたわけ息子に、

「ようはたりゃあとくりゃしたなあ。今度また来とくれよ。」

そう言って、うみゃあもんごちそうしてくれたと。そしたら、あんまりうみゃあもんで、たわけ息子は食った食った。でゃあてもらったのはみんな食べてまったと。

そのあと、うちの人間に聞いたげなわ。

「ぎょうさんよばれたで。これは、どういう名みゃあのもんでゃあ。」

うちの人は言った。

「こんなもん、食ったことにゃあきゃあも。ただのだんごだぜぇも。」

「ほうきゃあ。だんごというのきゃあ。おおきに。」

たわけでも、きちんとお礼言って、そのうちを夕方出たと。
だんごいう名みゃあを忘れるといかんもんでな。
「だんご、だんご、だんご、だんご……。」
道みち言いながらきゃあてったと。
けども、途中の天白川まで来たら、橋がこわれてのうなっとった。そこで、なるたけ川の水が少にゃあとこをさぎゃあて、けつまずかんように川の中の小石や砂地のとこを、
「どっこいしょ。どっこいしょ。」
と、五へんばかりとびこえて堤防へあがったと。
そしたら、だんごいう名をころっと忘れてしまったげな。そんで今度は、
「どっこいしょ。どっこいしょ。」
そう言いながらうちへきゃあてったと。
「どっこいしょ。どっこいしょっと。おっかあ。ええもんよばれてきたで。」
夕食のまわししとったおっかあは、息子の方をむうて聞いた。
「どんなもんよばれた。」
「どっこいしょだ。うみゃあもんだで。うちで作ってくれ。」
「ほんなもん知らんわ。」
「おっかあ。おみゃあ、たあけと違うか。あんなうみゃあもん知らんか。」
おっかあと言いやあしたけど、だんごいう言葉はしみゃあまで出てこなんだと。
それからたわけ息子は、たんぼで働くと、どっこいしょがもらえると思って、
「どっこいしょ。どっこいしょ。」
言いながら、汗でゃあて働くようになったそうだ。
ずっとずっと、昔の話だわなあ。

〈買い物の名〉 『長久手町史』より

忘れんようにてってね、ほんで、よう
「道々そう言ってけ」
って。ほんで、
「団子団子」
って言って行ったところが、溝跨ぐときに
「どっこいしょ」
って、渡ったもんで、まあほんで団子忘れてって、
「どっこいしょ下さい」
って言ったんだってね。

これは、大成362 A「団子聟」の話型に相当するよく知られた話であるが、慣れない話者が、記憶の断片をそのまま表現した長久手町の例は、資料としては貴重であっても、読み物には物足りない。これに対して岡田の再話は、発句・結句と形をととのえ、生き生きとした会話を展開して、ストーリー性を高めている。

グリム童話も、ジェイコブズによるイギリス昔話も、聞き手・読み手としての子どもを意識しつつ、原話のもつ味わいを損なわないように気をつけて再話されたものであったが、その再話力のゆえに、世界各地の子どもたちに愛されるまでになったのである。岡田の場合も、聞き手でありながら同時に

語り手であったということが、生き生きとした再話を書く上で大きな力となったと思われる。

また、老人から直接話を聞いているかのようなおだやかさと心地よさが、岡田の昔話の語り口から感じられるのは、岡田の体にしみついた名古屋弁の自然さにもよるが、いまひとつ、その使い方の巧みさもある。合の手を入れながら、忘却の闇の中から昔話や伝説の断片を引き出し、つなぎ合わせ、組み立てる岡田の方法は、聞き手と話し手の共同作業ともいえよう。

しかし、テレビが茶の間に普及して久しく、昔話をお国言葉で聞くなどということは、もう無理になってしまったのかもしれない。岡田自身も、40年間の聞き歩きの終わり頃には、「畑仕事をしている老人もいなくなり、今ではもうほとんど話を聞いていない。」と述べている。各自治体や団体が集めて冊子に印刷した昔話・伝説も、文献からとったものがほとんどである。

しかし、昔話は本来語られるべきものであって、語り継がれる中で形も洗錬され、話のエッセンスが生き残ってきた。「これをお読みになった方は、どうか子どもたちに話してあげてください。」という岡田の希望通り、当地で伝承の灯が輝き続けることを願ってやまない。

注

(1) 名古屋市各区の区史に見られる伝説（神話・世間話を含む）・昔話数は次表の通りである。

区名	伝説数	昔話数	区名	伝説数	昔話数
東	12	0	熱田	5	0
*千種	12	2	瑞穂	0	0
中村	6	0	天白	0	0
北	0	0	港	0	0
守山	3	0	中川	0	0
西	—	—	南	1	0
名東	3	0	緑	0	0
中	0	0	昭和	1	0

＊千種区の資料は、岡田弘『千種区の昔話と伝説をたずねて』を共通語で要約したものである。

(2) 『日本昔話通観』第13巻東海編中の名古屋市内で採集された話は、次の通りである。

- 蛇嫁入り—蛇の子出世型　類話1　（伝説）
- 鼠の楽土—成功型　類話1　（昔話）
- 猫壇家　参考話3　（伝説）
- 忠義な犬　類話1　（伝説）
- 三つの呪物　類話1　（伝説）
- 小僧が見たらば蛙になって3　（昔話）

(3) 『千種区の昔話と伝説をたずねて』あとがき

(4) 『南区の昔話と伝説をたずねて』あとがき

(5) 荘川村口承文芸学術調査団編『荘川村の民話』荘川村教育委員会　p. 262

(6) 『長久手町史』資料編4　p. 454

参考文献

- 『日本昔話通観』第13巻東海編　同朋舎出版（1980）

・柳田國男「口承文芸史考」(『柳田國男全集』) 8所収、筑摩書房 (文庫版1990)
・『日本昔話大成』角川書店 (1979)
・荘川村口承文芸学術調査団編『荘川村の民話』荘川村教育委員会 (1993)
・『長久手町史』資料編 4 (1990)
・竹内俊男『東海のことば地図』六法出版社 (1982)